

小田実全集（評論 第16巻）

われ = われの哲学



講談社
小田実全集
Makoto Oda

目次

I 「現場」と「場」

- 1 体験のなかの「現場」 10
- 2 「現場」のせつばつまった記憶 14
- 3 「現場」は波風が立つ 18
- 4 ただの道路に問題が噴出する 23

II 「運動」と「行為」

- 1 運動、人間、行為 27
- 2 「地下広場」と「地下通路」 30
- 3 「場」が崩壊するとき 33
- 4 「現場」は四方にひろがる 35
- 5 階層のピラミッド 37
- 6 閉ざされた「場」、開かれた「現場」 41
- 7 子供の微笑の力 45

III 「現場」の論理と倫理

- 1 二つの視点・世界をどう見るか 50
- 2 「天下の道理」と「人の世の情け」 54
- 3 生ま身の人間が生きて行く場所 60
- 4 決断、選択、行為 62
- 5 「現場」と「場」のあいだの距離 66
- 6 「正義の法廷」 70
- 7 道理の感覚 74

IV 「現場」のなかの人間

- 1 「市民」「市民社会」「市民運動」 78
- 2 「現場」のなかのからだ、ことば 81
- 3 「もの」と「こと」としての「事物」 87
- 4 「商標」のピラミッド 91
- 5 「物」における「延安」 94
- 6 「もの」「こと」における「先進国」と「第三世界」 100
- 7 「こと」としての「学生の反乱」 109
- 8 「欲望」と「他者」 112

9 「小説的認識」「小説的論理、倫理」

V 「助ける」人と「殺す」人

1 「今日よりよい明日の場」を求める

2 「市民運動」の思想

3 自己肯定に終った「自己否定」

4 「被害者⇨加害者」のしくみ

5 「ヒロシマと言うとき」

6 しくみの連環を断ち切る

7 「現場」の二つの行為・「助ける」「殺す」

VI 「助ける」行為の意味

1 人間は助けて来た

2 「現場」のオイディプスとテセウス

3 「助ける」「助けられる」・人間の自由

4 「われ⇨われ」と「われら」

5 「われ⇨われ」の「自立」

6 「平和族」と「白い侵略者」

7 「助ける」行為としての「市民運動」

VII

結びとしての長いあとがき

1 「市民」リーメンシュナイダー

2 「俗」についての「聖」

3 そのなかでそれをする

4 「俗」人アジエンデ

5 私自身の「われの現場」

6 「助ける」行為を根もとにおく

7 「現場」は過ぎ去ったのか

8 「強者」と「弱者」

9 「過去」と「壁」にむきあう

あとがきのあとがき

われ
||
われ
の
哲学

I 「現場」と「場」

1 体験のなかの「現場」

「現場」ということばがある。ヨーロッパのことばで何と言うか、また、この漢字二字のことばの意味が中国語でどういうことになるのか知らないが、この日本語はふり幅も大きければふところも深い、そして、鋭い意味を持ったことばだ。もちろん、ことはことばだけの問題ではない。「現場」ということばを口にするとき、あるいは耳にするとき、私たちはことばの意味するものを何かつねならぬ気持とともに明瞭に心のなかに思い浮かべている。「現場へ行け」、「現場を離れた」、あるいは「現場で死んだ」というようなことばを言い、聞くとき、私たちは、「あの部屋にあるのは机だ」と言うとき、言われたときと同じほどにたしかなものとしてことばの意味を把握している。もちろん、そのときも、ひとりひとりが思い浮かべる机の姿かたちがつているように、「現場」のさまはそれぞれにちがつていることだろう。しかし、それにしても、「現場」ということばは判る。誰にも判るたしかなものとしてある。そして、そこにはいつも何かつねならぬものが結びついている。

私をはじめてこの世界における「現場」の存在を漠然とながら意識し始めたのは、子供のころ、私の住んでいた大阪に空襲が毎日のようにつづいていたときだった。この世界には「現場」というものがある、それはどうやら私がつね日ごろくらししているふだんのくらしの「場」とはちがう——とい

うふうにでも感じ始めていたにちがいない。夜中、空襲警報が不気味に闇のなかで鳴りひびいて、服を着て綿入れの雪国の子の帽子のような「防空ズキン」をかぶり、脚は脚でゲートルを巻きつけて、それなりの私の空襲用の服装を整えると、それが私なりの「現場」での「戦闘服」であつたことになるが、まっ暗な戸外に出て不安におびえながら庭の冷たい防空壕の暗黒のなかに入る。それはそれだけで異常な緊張に満ちた「現場」に入つて行く感じになつてはいたが、そのうち当時の空襲の主役だつたBⅡ29爆撃機の不気味な爆音が聞こえ始めたかと思うと、やがて頭上に爆弾の落下音がゴウツと鳴つて、私が父や母たちといつしよに底にうずくまつていた粗末な防空壕の壁が地震にあつたようにゆらぐ。その瞬間、私がいるその場は、たしかに「現場」になつていた。

それだけの一部始終を私がまだ昨日のことのように防空壕の壁の土の色とともにあざやかに思い出すことができるのは、やはり、その「現場」が私のふだんのくらしの「場」と確実に切れたものとしてあつたからだろう。ふだんのくらしの「場」については、それほどの記憶の鮮明さを私は決して持ちあわせていないのだが、その粗末なお手製の防空壕も、実際に空襲がなくてただつくつただけのものとして終つていたら、壁の土の色までおぼえているというようなことはなかつたにちがいない。

ここで空襲の思い出話をするつもりはない。簡単に書いて行きたいのだが、いざあたりが火焰の海と化したときには、もう防空壕にひそんでいるわけにはいかない。慌てて外に出たときには、あたり一帯は火焰の吹き出す煙がつくり出す壁で上空高くまで包み込まれていたのだろう、「核の冬」と今さかんに取り沙汰されている現象の小規模なものが起こつていて、昼日中でもあたりは夜のように暗くて、その暗いなかを火焰が万物を吹き飛ばすほどの強烈な烈風をとまなつて縦横に動く。それはま

さにこの世ならぬさまの「現場」だったが、その「現場」で私が考えていたのは——いや、考えるというよりは全身で感じとつていたのは、まず、この「現場」からどのようにして逃れようかということであると同時に、どうにももう逃げようがないというぬきざしならない気持だった。

とにかく、そこは「現場」だった。私はまちがいに私なりに「いくさの現場」にいたのだが、「現場」は空襲のないときもつづいていた。これから述べる「現場」も、直接の「いくさの現場」ではないにしても、何かの「現場」だった。もちろん、ことを大きくとつて言えばたしかに「いくさの現場」ということになるかも知れないが、小さな範囲にことをとどめて言うとする、あの「現場」は何んの「現場」だったということになるのか。私は「現場」と言うと、ふしぎにそのときの光景を思い浮かべるのだが、それはその「現場」が「××の現場」と言うよりは純粹に「現場」そのものであったからかも知れない。

「××の現場」とうまく言えないのに、たしかに「現場」は「現場」だった。その意味では、もっとも「現場」的な「現場」だっただろう。

当時中学の三年生以上の生徒は正式に「学徒動員」されて、工場とか国鉄の操車場のようなところで働かされていたのだが、私のような一年生の下級生は、そういう「正式の動員」の代りに、空襲のあい間をぬうようにして焼跡を「かたづけ」るのに駆り出されたりしていた。焼跡を「かたづける」と言っても、要するに道路にまではみ出した瓦礫やらただの鉄屑と化した建物の鉄のワク組みを本来はその建物群が建ち並んでいたあたりにほうり上げるといふことにしかすぎないことだったが、そういう作業をやっているとき、よく黒焦げになった死体が出て来た。瓦礫をトビ口とか畑仕事用のクワ

とかでひっかきまわしているうちに、そうした道具の尖端が物をひっかけてしまうのだ。「物」とまことに即物的な言い方を私がここでするのは、あのころ私たち中学の下級生たちがそう呼んでいたからだが、そういう呼び方自体、何やらあのころの少年たちのすさまじった気持を言いあらわしているような気がする。

私たちはそういうとき、いちように「現場」に立っている感じになつていたのでないかと思う。こまかく言えば、「黒焦げの死体の現場」だが、それよりは実感としては、「何かしらの現場」だ。黒焦げの死体のなかでも私が今でもよくおぼえているのは、洋服屋にある人台のようなまつ黒焦げの胸だけの死体で、それはまさに人間の死体と言うよりは、ただの「物」の感じになつていた。いまだに洋服屋の店頭で人台にお目にかかるといやな気がするのは、そのときの記憶がよみがえつて来る感じになるからだが、同時に私はぬきさしならない「現場」のなかに閉じ込められてしまったような気にもなる。そういう「黒焦げの物の現場」には特有の臭気があつて、私がいまだに缶詰のサケを食べるのに抵抗があるのは、黒焦げの「物」のせい、つまり、その「現場」の臭気が缶詰のサケそっくりだったからだ。こういう臭気の記憶をふくめて「現場」の体験を思い出すことで私はのちに『「難死」の思想』という文章を書いたが（※「講談社文庫」の私の『「物」の思想「人間」の思想』のなかに入っている）、それは黒焦げの「物」たちが、人が人為的に起こした戦争のなかで死んだ人たちであるようにどうしても見えなかつたからだ。何か大きな、人間の手でどう防ぎようもない自然の大災厄のなかで、大災難にあつたようにして死んでいた。

これは、それほど彼らが人間らしく死なせてもらつていなかったということだろう。同じ死にして

も、人間には人間の死にかたというものがある——と私が考え出したのも、その「現場」のなかでだった。

※編集部注——『難死』の思想』は、本全集評論第4巻「戦後を拓く思想」に収載。文庫版は絶版。

2 「現場」のせつぱつまった記憶

あまり空襲が度重なるので、私はいくさの末期には、もう私の「戦闘服」のいでたちのままで寢床に入ることにしていた。いや、そのうち私はさらに横着になって、空襲警報が鳴っても、やって来る敵機が一機か二機のような場合には、防空壕に入らずに寢床のなかでがんばることにしていた。ふだんのくらしの場がそこでそのままいけば居ぬきのかたちで「現場」になっていたわけだったが、一度そういう横着をきめ込んでいたときに、近くの帝国陸軍の陣地からめずらしく射ち上げた高射砲弾がこれもまた珍しく命中して、私たちの頭上にやって来た一機が巨大な火の玉となって墜落して行った。私は墜落する火の玉そのものを見たわけではない。ただ、私が寝ていた家のなかがすみずみまで明るく照らし出されたのはよくおぼえているのだが、その瞬間、家のなかは一瞬にして「現場」に化していたにちがいない、ふだんのくらしのなかで電灯に照らし出された夜の家のなかのたまたまの記憶はさだかでないのに、火の玉の照明で「現場」と化した家のなかのさまはよくおぼえている。たしかにそのとき、そのさまはふだんのくらしの場のさまではなかった。それはそのままのかたちで「現場」——息づまるような「現場」になっていた。

ずつと後年になって、私は面白い体験をしている。不幸な戦禍の歴史がいまだにつづくレバノンで

のことだ。何年か昔、それは今とくらべてはまだまだ平穩無事な時代だったと言うべきころの話だが、ベイルートからローマ時代の神殿の遺跡で名高いパールベックまで車で走ったことがある。今はパールベックは「イスラム左派」と言うのか「原理派」と言うべきなのか、とにかく彼らのコマンド闘争の根拠地になっている土地で容易に近づけないようになっていらいが、当時はまだそんなことはなかった。パールベックのそのローマ時代の神殿がレバノンの観光ポスターになっていたころのことだから、観光客も車でベイルートからいくらでも出かけていた。

ただ、もうそのころにはパレスチナ解放闘争がレバノンの内部のあちこちに根拠地をつくってイスラエル相手の闘争を始めていたから、まだアラブ世界の商業の中心として機能していたレバノンは（いつとき、日本人が千人ほどもいた。その大半が商社のように商売をやっている人たちだった）、奇妙な言い方になるが、すでに商売と観光と闘争と殺戮が同居している国になっていた。

私もパールベックにのんきに観光に出かける前日か前々日かには、パレスチナ解放闘争のコマンド兵士たちといっしょに小型トラックに乗って、彼らの前線の基地まで出かけていた。その基地までは、かなりの長さの距離を、ベイルートからシリアのダマスカスへむかう、日本で言うならまさに「国道」という感じの道路を使つて走るのが、パールベックへ行くのも同じ「国道」を使った。ベイルートからスキー場としても名高い風光明媚な、別荘地の建ち並ぶ——すくなくともそのころには建ち並んでいた、山脈を越えて降りたあたりで、「国道」をはずれてパールベックへは左、基地へは右にむかう。基地へむかつて小型トラックで走ったときには、小型トラックには自動小銃やら手投げ弾やらが山と積み込まれていた上、私までが万が一のときの用意に、「カヤム」と言ったか「アブドウル」と

なっていたか、とにかくそんな名前の医者になりすまして私のかいもく読めない文字で書いた身分証明書まで持たされていたこともあつてのことだろう、私はやはり緊張していたにちがいない。油断なくあたりに眼くぼりしていたおかげで「国道」のまわりの風景のたたずまいは、あざやかにいまだに眼に焼きついている。それはそのとき、そこが私にとつての「現場」としてあつたからだろう。しかし、翌日か翌々日だけにタクシーでパールベック見物に出かけたときには、「国道」はただの行きずりの場にすぎなくなっていたにちがいない、私は何ひとつそこで見ていなかった。大半の行程を私は安心して眠つてしまつていた。

そこまでの苛烈さはもちろんないが、私が日本の県庁所在地ぐらいの大きさの都会の目抜きの大通りあたりのさまをよくおぼえているのは、ベトナム反戦運動が最高潮に達したころ、日本をあちこち旅に出かけては各地のデモ行進に参加したことがあるからだろう。ここ十数年、日本じゅうどこでもさまがわりが激しいので大きく変つていなければの条件つきで言うことだが、デモ行進は目抜きの大通りで行われることが多かったから、よくおぼえているのだ。ただ、ここでひとつ言っておきたいのは、もし私がただの旅行者として訪れて目抜きの大通りを散歩していたとしても、私は今のようにははつきりと大通りのさまをおぼえていないだろうということだ。やはり、そこには目抜きの大通りをデモ行進というかたちでいささかの緊張をおぼえながら仲間といっしょに歩いたという事情がからんでいた。さつきからの言い方をすれば、そのとき目抜きの大通りは、私にとつての「現場」になつていたので。いささかでも「現場」のたたずまいを見せていたからこそ、そのさまは私の記憶に刻み込まれたにちがいない。

もちろん、そうしたデモ行進の「現場」のことを言えば、私にとつてのその「現場」は何んと言つても東京だった。赤坂見近くの清水谷公園から新橋、銀座にむかつて歩くというのが私たちのベトナム反戦運動（「ベ平連」という名で世に知られた、正式に言えば、『ベトナムに平和を！』市民連合）ということになる運動だった。この運動のことについては、また、あとで触れることになるだろう）のおきまりのデモ行進のコースだったが、おかげで、そのあたりの街のたたずまいは、まだ昨日の光景のようにあざやかに記憶に残っている。そして、その記憶の残り方は、毎日そこを散歩して歩いて何んとはなしに街のたたずまいが記憶に残ったという残り方ではない。風景だけが記憶に残っているのではないのだ。なかにいやおうなしに私がいた——という何かせつばつまった記憶の残り方で、どのなかにいたのかと言うと、もちろん、「現場」のなかにだ。

私は今あらためて考えてみるのだが、私が自分なりに精を出してベトナム反戦の運動をすることがなければ、「現場」のことがこれほどは気にかからなかったにちがいない。それは、大きく言って、二つの理由からだったと思う。

ひとつは、もちろん、私が自分の運動を通してかわりあつたベトナム戦争そのものが「現場」であつたことだ。ベトナムの人びとはいやおうなしにその「現場」で生きていた。ということは、そこにかかわる私自身も、その「現場」に直面していたことになる。

もうひとつの理由は、運動するということは、これもまた、いやおうなしにさまざまな「現場」をつくり出し、それに直面することである。ベトナムの人びとの解放闘争がそうした運動であつたとするならば、私たちの運動もごく小さなものであつたとしても「現場」をつくり出し、私はそれに直面し

ていた。私は私なりに「現場」で考え始めなければならなかった。その考えることのなかに、当然、「現場」そのものについてのことがあった。

もちろん、政治運動だけが「現場」をつくり、それに人間を直面させるものとしてあるのではない。私たち人間が生きて行くこと自体が「現場」にぶつかると、ときには自らが「現場」をつくってそこに直面することだ。私には、おそらくベトナム反戦の運動を自分で行なわなかったならば、人間の生き方のありようをそういうかたちでは理解しなかつただろうと思う。人間の生き方のありようをそう理解することは、人間が生きて行くことの総体である世界をそんなふうなかたちで認識することでもあるにちがいない。実際、私は世界をそうした眼で見ることを始めた。

3 「現場」は波風が立つ

「現場」ということばは、多かれ少なかれ、波風の立つことばだ。ことがまるつきり平穏無事に進行しているときには、私たちはこのことばを使わない。ふつうの恋愛のことを言うとき、私たちは「恋愛の現場」とは言わない。しかし、「不倫の恋の現場」という言い方はする。「不倫の恋」はふつうの恋愛の場合とちがって、ことがきわだつてもいれば、せつばつまつてもいるからだろう。そう感じとれているからだろう。ふつうのくらしの場の平穏無事に対して波瀾万丈。安定に対して不安定。継続、反復、情勢に対して切斷、一回こっきり。ただの自然死に対して、私たちは「現場」の死だとは考えないし、言わない。しかし、「殺人の現場」、「自殺の現場」とは言うだろう。あるいは、ことを逆にきわだたせようとして、私たちは「現場」をあえて持ち込む。ことがらに、このことばで事件性、切

迫性、緊張性をあたえようとする。「これがおれたち二人のなれそめの現場だよ」と、ユーモラスに言うことはできる。そして、「現場」を持ち込むことで、ことがらをきわだたせるとともに、一見平穩無事に見えることのなかにも問題ははらまれていると強く主張することもできる。「あなた方、おえら方は庶民のくらしの現場を知らない。」「農村の現場を知らなくて、農民の問題を論じることができると思ふのかね。」「きみもたまには労働の現場に降りて来いよ。」

平穩無事に逆らい、波風が立ち、そこに切れ目ができるのだから、当然、ことばは何かしら闘争性を帯びて来る。端的な例が「闘争の現場」だろう。あるいは、「戦闘の現場」。ふだんのくらしのなかでのそうした「現場」となると、たとえば「ケンカの現場」だ。

こうした言い方が示しているように、「現場」には、何かぬきさしならぬきびしさが附随している。とにかくのんびんだらりとはしていないのだ。どこかに真面目、真剣、努力、献身……といったふうな人間のひたむきさにかかわっているところがある。「金儲けの現場」ひとつをとってみても、私たちがそのことばですぐ連想するのは、中小企業の社長が汗みずくで金儲けに奔走している姿か、株屋が株価の動向に神経をすりへらしながら株の売買で大バクチを打っているたぐいの図柄の「現場」で、冷房のよききいたきれいなオフィスでサラリーマンが静かに事務をとっているという想像図ではないにちがいない。と言うと、満天下のサラリーマン諸氏を馬鹿にしたような感じになるので、そちらのほうは「仕事の現場」とか苛烈な「出世競争の現場」とかのことばを使って言いあらわせる「現場」だと書いておきたい。

ここで対照的な例を持ち出すと、私の言いたいことははつきりするにちがいない。そのサラリーマ

ン諸氏がゴルフにしろマージャンにしろ、遊びに出かける。そのときには、「現場」ということにはふつうならない。「遊びの現場」とはふつう言わないものだ。

同じ道路をたどつていても、「デモ行進の現場」とは言つても、「散歩の現場」「ジョギングの現場」とは言わないにちがいない。それでいて、もちろん、「××氏が散歩の途中に殺された現場」「ジョギングの最中に五人連続して倒れた現場」とは言うだろうし、「このスタジアムは××選手が×月×日、不滅のホームラン最多記録を達成した現場だ」というような言い方はいくらでもお目にかかる表現だ。あるいは、「冗談まじりに、「この店はおれがこのあいだ二晩徹夜マージャンをやった現場だよ」と言う。

こうした例が示しているように、「現場」には、ことばのどこかに時間と場所の特定が附随している。そこでのつべらぼうの時間と空間に切れ目を入れている感じだ。早い話、さまざまな「歴史の現場」である。「××蜂起の現場」には一回こっきりの「現場」の日づけとそこでしかあり得ない場所の刻印が明瞭に押されているにちがいない。そうした時間と場所における「特定性」は、「特定性」からもつとも縁遠いはずの「くらしの現場」にもどこかにつきまといつていて、「農民のくらしの現場」という言い方にも、いつ、いかなる時代の、またどこの国の、というふうな「特定性」がそこに内包されていると見てよいだろう。「教育の現場で何が起こつているのか」というたぐいの新聞や雑誌の特集記事の題目によくある文句のなかの「現場」は、そのまま、小学校の卒業式に「君が代」を半強制的に歌わせる、あるいは、非行中学生が暴れまわるといふたぐいの「今日の日本の教育の現場」をそのまま言いあらわそうとしていふことばだ。

「現場」ということばで、もうひとつぬきざしならぬ気持ちになるのは、ふつうのふだんのくらしの「場」

のなかではみんながいつしよにいてどこにでも逃げ道があったり、誰かが助けてくれたりする気が暗黙のうちに行っているのに、「現場」となると、自分ひとりで逃げ場のないところに突っ立っているような感じがして来るからだ。壁が自分のまえに屹立していて、そこで進むも退くも、自分ひとりの決断という感じがあるのだが、考えてみると、人がときどき口にする「現場へ行け」という言い方には、「行っておまえひとりで壁に直面しろ」というひびきがあるのだろう。「こんなところにノホホンとしていないで、ひとりで現場で苦労して来い」という意味あいが、そこに往々にしてふくまれている。

「現場」の目撃者の場合は、壁は自分のまえに屹立しているだけのことだが、「現場」の当事者となると、壁は自分のまわりの四方に突っ立っていて、文字通り包囲された感じになる。「現場」の目撃者の場合には、くるりとからだのむきをかえて「現場」に背をむけてしまえば、どんなむごたらしい殺戮の現場も自分にとつて存在していることにならない。それに、もちろん、人間はどんな「現場」も見ても見ぬふりをして通り過ぎて行くことができる。おかげで「殺戮の現場」もあたかも見なかったようにして、それがなかったようにして行くことができるのだが、「殺戮の現場」が存在していない以上は、「現場」に踏みとどまって血みどろになりながら救出作業に乗り出すこともなければ、わが身の危険をかえりみずに殺戮者のまえに立ちはだかつて「殺すな！」と叫ぶ行為に出ることにもならない。あるいは、そのとき、自分はこわくて叫び出せなかった——それが一生の負い目となって残って彼の人生を変えた、というようなことにも決してならない。

しかし、「現場」の当事者となると、「現場」からすぐ逃げ出すわけにはいかない。壁は自分のまわり、四方にはりめぐらされているのだ。そこから逃れ出るためには、まともに壁をぶちこわしかか

る必要があるだろう。「殺戮の現場」のことで言うなら、自分で殺戮者にたちむかつて行かなければならない。この場合、もちろん、その「現場」にいるみんなでいっしょにたちむかつて行くというとはあるだろう。しかし、その場合でも、とにかくまず自分がたたかうという覚悟をきめていなくてはならないにちがいない。どういう場合にせよ、自分で「殺戮」という殺戮者の行為によつてかたちづくられた「現場」にまともにむきあわなければならぬのだ。

あるいは、こういう場合もよくあることだろう。「殺戮の現場」の目撃者、あるいは、ただの野次馬の見物人が、「現場」の光景を見るに見かねて救出作業に参加し、殺戮者に「殺すな！」と叫ぶことで、本人自身が「現場」の当事者、行為者となってしまう場合だ。はじめはただの野次馬で、いつでもそこに背をむけて「現場」を「あたかもすべてでないものであった」ようにすることのできた彼は、もうそこで「現場」の当事者、行為者となつてぬきさしならぬ状態にいる。

「いざ、現場に着いてみたら、わたしひとりになつていた」という言い方は、よく耳にすることばだ。ふだんのくらしの延長線上のようにしてにぎやかに「現場」にむかつて出発したつもりが、他のみんなは何んやかやと理由をつけて脱落し、気がついてみたら「現場」にたちむかなければならないのは自分ひとりになつていた——そういうこわさ、しんどさが「現場」には本質的にあるのかも知れない。そこで、自分ひとりでがんばるよりほかに道はない。そして、よきにつけ、あしきにつけ、結果もまづは自分ひとりのものだ。「現場」のこわさ、しんどさはそこまでのふり幅を持つ。

4 ただの道路に問題が噴出する

「現場」はきわだつて意識される、されざるを得ないものとして私たちのくらしのなかにあるが、「場」はそれにくらべると空気のようなものだろう。私たち人間は当然空気があることを前提として生きてるので、ふつう空気の存在を意識することはないのだが、突然、何かの理由で空気が不足して来て酸欠の状態になると、たちまち、そのふつうのくらしの「場」は「酸欠の現場」というシユラ場と化して、私たちはまさにそのシユラ場の「現場」のなかで空気の存在を意識する。そして、それはまた同時に、空気が充滿していたふだんのくらしの「場」を意識することでもある。

「現場」の緊急性、不安定性によつて、私たちは「場」の平穩無事性、安定性、を意識し、同時にそのうした特性を本質的に持つ「場」の存在そのものを意識するのだが、つづめて言えば、「現場」における「場」の不足、欠如が「場」を意識させることになる。もちろん、これは「場」の不足、欠如によつて、あらためて、自分が今「現場」にいるというぬきさしならぬ状況を意識させることにもなっている。こうしたことは二つともに、私が子供のときの「空襲の現場」でいやというほど感じとつていたことだ。

そして、空襲のあとの「助かった」という実感は、空襲のあいだだったん「現場」と化していたわが家の内部がふだんのくらしの「場」に立ち戻ったという認識、あるいは感覚に裏うちされていた。

そのただの「場」に立ちかえった座敷のさまを見ながら、私はたしかに「助かった」という実感を持った。そこでの「現場」の不足、欠如が「現場」のこわさ、しんどさをもう一度思い出させるのと

同時に、それがまた「場」に今自分がいることの再確認にもなっていた。

ふつう、人間は「場」に安住している。逆に言うと、安住できる場所が「場」だ。ただ、人間は「場」に安住しているだけでは生きていられない。生きて行くことは、さまざまに「現場」にさまざまにぶつかること、あるいは、それを自分でつくり出すこともある。早い話、「場」での安住の基本となるくらしをたてるためには、「労働の現場」で汗を流さなくてはならないだろうし、「金儲けの現場」であたふたと駆けまわらなくてはならないだろう。くらしそのものにも、もちろん、「くらしの現場」がある。人はそこで生きて行くためのいろんな問題に直面することになる。子供を学校に行かせれば、いやおうなしに日本の、「教育の現場」に入り込んでそこでの問題に直面することになるだろうし、たとえ「現場」を離れた老人でも、病気にかかればたちどころにこれもまた、たとえば、健康保険の制度がなし崩しに崩されて来ている日本の今現在の「医療の現場」に入り込んで問題にぶつかることになる。

人間が生きて行くことは、たえず矛盾に直面することだ。事物とは矛盾が必然的に生み出す運動だと説いたのは毛沢東だったが、人間もまさにその事物のひとつに他ならない。矛盾は問題を形成し、人間はどこでどうしてしようが、さまざまに問題に直面する。つまり、それはどんなに平穩無事に見える「場」にも問題はあまた内在しているということだ。その内在する問題が外に出て来ることで「場」は「現場」となり、逆に「場」は「現場」になることよって問題はそこに噴出して来る。

南アフリカ共和国の黒人にとっては、ただ通勤すること、通学することが、さつきからの私の言い方をすれば「現場」だ。そういう意味の彼ら自身によつて書かれた文章を私は読んだことがある。た

えず身分証明書の提示を求められ、さまざまな口実でどのような迫害を受けることになるかも知れない彼らにとっては、白人たちにはただの通勤、通学の途上にすぎない道路が、そのまま「迫害の現場」ともなれば、「たたかひの現場」ともなる。

道路は、彼、彼女という黒人がそこに出現するまでは、ただの「場」だろう。ただ、その「場」は「アパートメント」という人種差別を基本にした支配の問題を内在させている「場」だ。その問題は、何十人、白人が歩こうとも表に出て来ることはないのだが、黒人がひとりそこを歩くことによつてたちまち噴出する。そのとき道路はただの「場」から「現場」に転化するのだが、道路は「現場」になることによつて、そこに他のあまたの問題——たとえば、権力者による暴力、あるいは、その暴力に対する抵抗、そうした問題も次から次に立ち現われて来るにちがいない。後者にかかわつて言えば、暴力に対して暴力で抵抗するのか、あくまで非暴力に徹してたたかうのか、という問題にまで、「現場」が提起して来る問題のふり幅はひろがる。

ここでひとつ留意しておきたいのは、ただの通勤、通学の「場」であるはずの道路が黒人たちにとつてシユラ場の「現場」に転化しているあいだも、同じ道を通る白人たちにとってはただの「場」でありつづけていることだ。それは、「現場」に転化することによつて、黒人たちには「場」に内在していた問題が一挙に眼に見えて来るのだが、白人たちにはそれが何ひとつ見えて来ないということだろう。支配、差別、暴力というような問題は、どんなくらしの「場」にもある問題で白人たちのくらしの「場」にも内在しているのだが、彼らの眼には見えて来ないのだ。彼らの「場」がそれほど強固に安定、平穩無事であつて、そのすべての問題の滲透を阻む強固な壁の存在のおかげでそれらの本来的

に内在する問題は彼らの眼に見えて来ないのだが、それに対して、黒人のくらしの「場」は、そうした強固な壁を持っていない「場」だろう。白人たちの「場」が堅固なトリデであるとすると、こちらのほうは外界の風が容赦なく吹き入って来るあばら家だ。問題はいやおうなしにすけて見えているし、それはいつ何んどき入って来て、あばら家全体をゆり動かすことになるかも知れない。同じ「場」と言っても、今すぐにでもシユラ場の「現場」に転化しかねない「場」で、きわめて「現場」的な「場」だと言えるだろう。

しかし、ことは何も遠い南アフリカ共和国の話にしないでいいだろう。それほどあばら家ではなくても、在日朝鮮人のくらしの「場」はいやおうなしの脆弱性を持った「場」だ。彼らには、外国人登録証の所持携帯が外出してどこに行くときにも義務づけられていて、げんに近所のフロ屋に行くうとして、その「犬の鑑札」と彼らによって称されているものを所持していなかったゆえに逮捕された人がいた。これはただの近所が、彼らにとってはいつなんどきふうのくらしの「場」から支配、差別、暴力、あるいは、それらに対するたたかいの「現場」に転化することになるかも知れないという事情をまことにあからさまに示している事実だ。

II 「運動」と「行為」

1 運動、人間、行為

「現場」の基本にあるものを考えてみよう。

まず、そこには運動がある。自然であれ、人間であれ、人間が自然のなかに自らの行為によってくり上げた社会であれ、それらすべての事物の運動である。この場合の運動は、もちろん、「場」の安定、平穩無事を吹き払って、「場」の問題をむき出しにし、「場」を「現場」に変え得るほどに強力な運動であるにちがいない。私たちは「おそろしい台風の現場」と言うが、「気持のよいそよ風の現場」とは決して言わないだろう。同じ地震についても、「地震の現場」、「大震災の現場」とは言うが、「微震の現場」とは言わない。そして、「台風の現場」「地震の現場」ということばで、私たちは自然の現象だけを思い浮かべているのではない。倒壊した家屋、街に燃えさかる火焰、逃げまどう人びと、懸命の救出作業、運び出される憐れな犠牲者——というふうに、「現場」の運動はただちに人間に関係して来る。「現場」の基本に運動があり、運動の基本に人間がある。そういうものとして、「現場」の運動の本質がある。

もちろん、私たちは想像力の助けを借りて、はるかかけ離れた宇宙空間での天体の「衝突の現場」を思い浮かべることはできる。しかし、専門の天文学者の場合ならいざ知らず、そのさまがどこかで

人間くさいものであるであろうことは容易に想像がつく。最近流行の「宇宙もの」の映画やら小説やらが提供するさまざまな「現場」は、まことにウンザリするほど陳腐に人間くさい。

運動は、ある場合には、その力で「場」に内在する問題を噴出させ、今度はその問題の力で「場」を「現場」に変える。台風という巨大な運動はたちどころに自然災害に弱いという日本社会の問題を噴出させるだろうし、問題の噴出は、その力によつて、それまで平穩無事な「場」だった街の光景を一変させて「現場」にする。地震という運動も、防災態勢の不備から、それに名を借りての管理体制の強化という政治的問題まで、「現場」と化した「場」に噴出させて来るだろう。南アフリカの黒人の場合は、ただ道路を歩くという何んでもない運動自体が「場」に内在した支配、抑圧、差別、暴力、たたかいなどの問題をすべて噴出させ、「場」は「現場」と化する。

白人の場合を、もう一度、ここで考えてみよう。彼らも同じ歩くという運動をする。しかし、彼らの場合、彼らの「場」はそれだけの運動では微動だにしない確固としたトリデとしてあつて、そこに内在しているはずの問題は決して噴出して来ることはないのだ。ただ、彼らの場合でも、今もし横を歩く黒人に手をさしのべるという運動にまで彼、彼女の動きがひろがるなら、それだけの運動がただちに「場」に内在した問題を噴出させ、「場」は「現場」に転じる。逆に言うと、南アフリカの白人たちのトリデとしての「場」も、その彼、彼女の運動に耐えるほどに強固なものではないということだ。もちろん、ここにはいくつかの問題がからんでいる。まず、認識の問題があるだろう。そして、認識の背後に、彼、彼女の体験、知識、見識、経歴、階級などさまざまなものがあるだろう。たとえば、ものを知らぬ日本人が黒人が道で白人の警官に身分証明書の提示を求められているのを見て、それ

はただそれだけの光景であつて、何んの問題も彼のまゝに噴出して来はしないにちがいない。その光景の「場」は、あくまでただの道路であることをつづけている。一步を進めて、今、白人警官が黒人に殴りかかったとしよう。たしかにそのとき、そこは彼、彼女にとつて「殴打の現場」として眼に見えて来るにちがいないが、「あのポリス、ひどいやつやな」というぐらいのことですんで、白人支配社会に内在する問題は彼らのまゝに噴出して来はしないにちがいない。そしてさらに、次のような事態を私たちはここで考えてみるができる。たとえ、そこで白人支配の社会の問題が噴出して来ても、たとえば、それをまったく自分に無関係な他人ごととしてとらえる事態だ。あるいは、見て見ぬふりをして通りすぎる事態だ。あるいはまた、もつと端的に言つて、そこから逃げる。

「現場」に問題が噴出するということは、その噴出して来た問題が私たちに解決を強いているということだ。いや、そう私たちが意識すること、**「現場」**の問題の噴出ははじめて眼に見えて来る。「ガス突出の現場」にあつて逃げることは、まちがひなく問題解決のひとつの対応だが、そのときの私たちの運動は徹底して本能的な運動だろう。こうした本能的な運動を一方の極において、他方の極に私たちは問題解決への志を強固に秘めた人間の運動を想定することができる。ひとつの例が、さっきの白人の黒人に手をさしのべるという運動だった。そこには彼、彼女の問題解決への志が、たとえばどんなに小さなものであつたとしても、そこにあつたことは事実だろう。そして、その問題解決への志の存在において、彼、彼女の運動は行為となる。いや、逆に私は人間の行為をそうしたかたちのものとして理解する。

「ガス突出の現場」で、人間が逃げるのは当然の本能的運動だが、その「現場」に救出におもむこう

とする人間の運動には、犠牲者をなんとか助けようという積極的な心の動きが基底にあつて、そこで救出者の運動は行為となる。問題解決への積極的な志があつての人間の運動が、行為だ。

2 「地下広場」と「地下通路」

「現場」での人間の行為が往々にして激しく波風を立たせるのは、問題の解決を求めようとする彼女の行為が、「場」の解決させまいとする力と必然的にぶつかり、それにさからうことになるからだ。ときには、そのさからいは、「たたかい」ということばでもっとも適切に言いあらわし得るものにまでなるだろう。このたたかいは、もちろん、何も激しい肉体の動きをとまなつてのものだけを意味しないにちがいない。ジョギングはどんなに激しく行なわれたとしても、あるいは何千、何百万の人間がいつしよに走つていようが、「現場」を形成しないが、かつてアメリカ合州国で「公民権運動」の口火を切つたのは、一九五五年にアメリカ合州国南部のモントゴメリーの中年の黒人女性が行なつた、バスのなかで白人用の座席に坐るというただそれだけの行為だった。その行為を、彼女は自分ひとりでした。

あるいは、歌をうたうことが、「場」を「現場」に変える。私がここで歌のこゝを持ち出すのは、六〇年代後半から七〇年代前半にかけてベトナム反戦運動がさかんだったころ、「ペ平連」の私の若い仲間たちが「フォーク・ゲリラ」をつくり（と言っても、はじめはほんの五、六人で始めたことだ）、新宿駅西口の「地下広場」で反戦歌を歌い出して、その「地下広場」をまさに「現場」にしたことがあつたからだ。たちまちのうちにその彼らのギターをひき、歌をうたうという行為は「地下広場」に

大きな人びとの渦巻をつくり出して大きな社会的事件になったのだが（つまり、それは犯罪事件になったということだ。「フォーク・ゲリラ」の若者たちは、まさにただ歌をうたうという行為において「犯罪」者とされた。それは彼らのその行為がただの「場」だったはずの、そう当局者によって理解されていた「地下広場」を「現場」に変えてしまったからだ）、この「社会的事件」をめぐる一連の経過は、これまで私が述べて来たことをみごとに、またいくぶん戯画的に言いあらわしているように見える。

「広場」は、元来は市民が集まり、自由、平等にしゃべり、あるいは歌い、ときには集会を開いて何かの行為に乗り出すものとしてあつたはずだ。すくなくとも、ヨーロッパの都市には市民が集まる広場がある、日本の都市にはない——という意味において言われる「広場」はそうしたものとしてあるのだし、また、あるべきものだ。と言うことは、「広場」はつね日ごろは「場」としてありながら、「現場」性をいやおうなしに内包していることだろう。もうひとつ書いておくと、言論の自由なり集会・結社の自由なりが、あるいは、その自由を裏うちするものとしての平等が、いかに「現場」性をはらんだものであるかは、この「広場」の「現場」性を考えてみれば判るにちがいない。「広場」はたんに市民の「いこいの場」としてだけあるのではない。市民の政治参加の「現場」としてもあつたし、蜂起の「現場」としてもあつた。

しかし、もちろん、新宿駅西口に「地下広場」をつくった当局者、あるいは、設計者はそんなことまでをも考えたのではないだろう。ヨーロッパの都市には広場がある、じゃあ、ひとつ、東京にもつくつてやれ、市民の「いこいの場」も必要だからな——というほどのことがそもそも発想だったにちがいない。そこに徹底して欠けていたのは、「広場」が政治活動をふくむ市民の自由な活動の場として

機能して来たヨーロッパの歴史に対する認識だったにちがいない。彼らの眼に浮かんでいたのは、ただの見ばえのよい「空間」だった。そして、「空間」には市民はいなかったにちがいない。すくなくとも、ただの「いいい」をしている市民ではなく、自分の意志をもつて行為をかたちづくる市民はいなかった。ついでに言っておこう。このごろいろんな人が論じるなかに「空間」ということがよく出て来るが、それは最近の思想傾向を言いあらわしていることかも知れない。その「空間」にはたいてい市民が存在していないのだが、最近はやりの「都市論」にもその傾向はあきららかに見えて、都市を市民不在の「都市空間」としてとらえる人が多いようだ。同じことは、このごろ同じようによく耳にする「トポス」ということばにも言えるだろう。人びとが論じる「トポス」は、ただの「場」としての「トポス」で、市民がかたちづくる「現場」としての「トポス」では決してないようだ。

しかし、「フォーク・ゲリラ」の若者たちは、「広場」をただの「空間」としてとらえなかった人たちだ。彼らは、「広場」をその歴史的意義とともに本来あるべきはずの「広場」としてとらえてそこで反戦歌を市民とともにうたい出したのだが、その彼らの行為は、ただの「空間」と化していた。「地下広場」をいきいきとした市民の政治参加の「現場」に変えた。同時に、その自分たちの行為によって、彼らは、本来的に「広場」としてあるはずの「地下広場」がまったくそうしたものとしてつくられていかなかったし、機能もしていなかったという問題を噴出させたと言えるにちがいない。彼らの行為はギターをひいて、ただ歌をうたうという、そのこと自体としてはまったく小さな行為だった（同じ音楽でも、彼らの歌うフォーク・ソング調の反戦歌は大きな劇場に何万人も集めて狂熱的に歌うロック・バンドの音楽とちがって、静かなものだった。しかし、ロック・バンドの音楽の場合、何万人がいつしよ

にいつとき踊り狂おうとも、それはただそれだけのことで、「現場」をかたちづくりはしない。もちろん、そこであまりの混雑のゆえに死人やケガ人が出たりすれば、そこにも「現場」は形成されるが、それはほんのいつときのことにはすぎないだろう。その小さな行為の力が問題を噴出させ、「地下広場」ばかりではなく「広場」をそんなふうにしたのだ。「空間」としてつくり、機能させて来た社会全体に内在するさまざまな問題を一挙に多くの人の眼にあきらかにした。騒ぎは大きくなり、「地下広場」はいよいよ「現場」になった。

当局者は慌てた。「地下広場」が「広場」であるかぎり、そこに市民が自由に集まって、歌をうたい、集会を開くのを妨げることはできない。まして、それを犯罪として取り締まることはできない。そこで彼らはどうしたか。これは「広場」が彼らにとつてただの名称の問題であつたことをよく示していることがらだが、彼らは一夜にして「地下広場」を「地下通路」という名称に変えた。「通路」はただの道路と同じく（しかし、道路もまた、「現場」性をはらみ得る。これはすでに私たちが見て来た通りのことだ）、人が通るための「場」だ。そこでみだりに立ちどまつたり、歌をうたつたりしては、まして、そこで集会を開くとすると、他人の迷惑になる。取り締められ。歌をうたう若者を逮捕しろ！

3 「場」が崩壊するとき

運動は自然の運動であれ、社会の運動であれ、あるいは人間の行為であれ、ものごとに変化をひき起こす。変化は運動の対象となつたものごとにも起こる。これは、運動をひき起こした側自体にも起こる。「殺人の現場」で行なわれる人間の殺人という行為は、相手に生命を抹殺するという大変化をひき起こす

だけでなく、多くの場合、殺人者自身をも変えるにちがいない。私がここで言おうとしているのは、彼がつかまって死刑になるとか一生牢獄ぐらしをするようになるというようなことだけではない。その行為は彼の精神の深部に影をおとしているはずだ。

ときには運動は「現場」をつくり出すことで、その力で「場」そのものをあともどりのきかないものにも変える。運動のなかには「場」自体の変革を求める人間の行為がある。その行為ですぐ誰しもの頭に思い浮かんで来るのは革命だが、モントゴメリイの中年女性の自分ひとりの行為も究極的に「場」を変える原動力となった。

こうした変化は「場」のありように大きくかわっている。「場」が強固なものとしてあるとき、運動はよほどの力がないと台風一過の結果に終る。「現場」はたしかにそこにあつたが、それは何んらの変化も「場」にもたらさないものだった。

逆に「場」が脆弱なものなら、見かけはどう逆に見えていようと、小型の台風が^{あつけ}呆気なくダムを決壊させる。あるいは、夫婦のあいだの何気ない一言が、彼らのくらしの「場」を「現場」に変え、結果として、仲むつまじい——と見えたはずの長年の夫婦生活を崩壊させる。もちろん、その場合、眼に見えないかたちながら彼らの生活の「場」に問題はもう爆発するまでに堆積されていて、新婚のころなら笑ってすまされたであろうちよつとした冗談が問題を噴出させて、彼らの「場」をシユラ場の「現場」に変え、「場」そのものを崩壊させたのだ。

革命が成功するのも、社会にあつた問題、矛盾がもうどうにもならないところまで来たときだ。そのとき、闘争の力が問題、矛盾を一気に噴出させ、「場」は自壊に近いかたちで崩壊して革命は成就

するのだが、結果として革命なったあと、新しく革命政権をつくった人たちは旧社会の問題、矛盾を一手に引き受けなければならなくなる。それは今、たとえばベトナムとニカラグアの革命政権が、あるいは、さらに最近のことで言えば、フィリッピンのアキノ政権がもろに直面している問題であるにちがいない。貧しさひとつのことを言っておいてもよい。私はベトナムとニカラグアで、痛ましい共通の体験を持っている。それは、どちらにおいても、「ワン・ダラー、ワン・ダラー」としつこく手をさし出して来る子供コジキの群れに出会ったことだ。

4 「現場」は四方にひろがる

ものごとが変わるといふことは、その変化の度合い、ふり幅、深さにいつも不確定の要素があるといふことだ。「現場」にいたるとき、私たちが「場」に安住しているときに感じたことのない不安と緊張にとらえられるのはそのためだが、「現場」は時間的にも空間的にも未知の測り知れないものにむかつて開かれている。ひと口に言ってしまうえば、そこでは何が、いつ、どこで、どう起こるか——基本的に言いつて予測はつかない。予測がつかないからこそ、それは変化であり、変化をいつも内包した「現場」だ。

ここで革命であれ戦争であれ、大スペクタクルの映画の撮影場面を思い浮かべてみる事ができる。エキストラが大群をなして蜂起、戦闘の場面を演じる。たしかにそれは激しい動きをともなった「現場」に一見見えるにちがいないが、その「現場」は決して空間的にも時間的にもひろがって行くことのない「現場」だ。つまり、それはそうであることによつて疑似「現場」ではあつても、ほんとうの

意味での「現場」ではない。それに対して、モントゴメリイの中年女性がただ坐するという行為によってつくり出した「現場」は、空間的にも時間的にも大きく開かれた「現場」だった。まさにそれゆえにこそ、まぎれもないほんものの「現場」になっていた。

こうしたほんものの「現場」は、過去に対しても開かれている。もちろん、ここで私が言おうとしているのは、革命なつたあと新しい権力者たちが歴史の書きかえを行なうというたぐいのことではない。歴史にかかわって言えば、私たちが歴史をただの読みものとしてでなく、また論文の材料としてでなくわがこととしてとらえるのは、多くの場合「現場」のなかでのことではないのかというのが、ここでまた私が書きたいことだ。何んらかの意味での「現場」の危機があつて、私たちは歴史を意識して読み、また、歴史を新しく書く。そのとき、私たちの立つ「現場」は過去にむかつてあきらかに開かれている。

「現場」には、時間の刻印が押されていると先に私は書いた。歴史を人は「現場」で意識するとも書いた。それは、もちろん、彼の立つ現在を未来、過去との結びつきのなかで意識することだ。そして、その未来、過去はともに、「現場」の現在がそうであるように、空間的にも大きなひろがりを持つ未来、過去だ。そういう四方にひろがる世界のまんやかに「現場」は位置している。位置するものとして、「現場」はある。

たとえば、「労働の現場」と私たちが言うとき、私たちは自分のぞくする工場の「現場」のことだけを考えているのではないだろう。もちろん、まずは、自分の「労働の現場」だ。しかし、こうしたきわだった言い方をするとき、まず私たちの思いは大きく横にひろがつて、日本に無数にある、ある

いは世界に無数にある工場のなかのさまを、そこでの労働者のありようのことを考えているにちがいない。そして、当然、その私たちの思いは日本の、また世界の過去の「労働の現場」にまでひろがって行くことだろう。私たちの思いは、この場合、まさに四方にひろがると言える。すくなくとも、それは四方に開かれているものとしてあるにちがいない。

こうした四方へのひろがり、あるいは開放は、自分の働く場所をただの「勤めの場」としてとらえるときには、決して私たちの思念には起こって来ないことだろう。空間的なひろがりとは自分の工場、会社の内部に限定されるだろうし、過去、未来に思いをはせることはあっても、それはまず自分の過去、未来にかかわつてのことだ（たとえば、これからの自分の昇進、あるいは、「わたしも昔はよかつた」）。ここで、ひとつ、変化にかかわって書いておきたいことがある。それは、「現場」がもたらす未来の変化のなかに、人間の生きる「場」そのものの消滅という変化も今あり得ることだ。核戦争という、まぎれもない人間の行為がかたちづくる「現場」は、そうした未来にむかつて私たちの生きる「場」を開かせている。これは、今、何ごとをするのであれ、考えるのであれ、私たちが基本のところにおいておかなければならない認識だと私は思う。この基本の認識を欠いた論議は、いかに深遠広大なものに見えようと、私の眼には救いがたいほど傲慢で、また浅薄に見える。

5 階層のピラミッド

この世界では、力ある強い者が力を使ってさまざまに階層をかたちづつつている。「階級なき社会」を標榜したはずの社会主義社会にあつても、今や、そのさまは歴然としている。歴然としていること

が、もう誰の眼にもあきらかになつてしまつてゐる。私たちが生きる「場」も、それぞれに階層のなかにふくみ込まれ、また、それぞれにふくみ込まれることで逆に階層を形成する。

強い者の力にはさまざまなものがあるだろう。「力」でまず私たちが考えるのは、政治力（それは国内的に言えば、権力だろう。世界大にひろげて言えば、「先進大国」の政治力は「第三世界」のチツポケな国々の政治力をはるかにしのぐ。もちろん、ここでもつとも強大なのは、アメリカ合州国、ソビエトの超大国の政治力だ。二つは、経済力、軍事力を背景に世界に君臨する）、経済力（せんじつめて言えば、金の力である。それ以上でもそれ以下でもない。ソビエトの場合でも、ソビエトの経済力は非・反「西」側を支え、また、それはさらにはるかに強力なアメリカ合州国を中心とする「西側」「先進国」の経済力を補完するかたちで「北」の世界を形成して「南」の世界を支配する）、軍事力（一国の国内的に言えば、警官の一挺のピストルの力も、また軍事力を形成する。まして、自衛隊の軍事力はとうていソビエト、アメリカ合州国の軍事力にかなうものではないが、私たち日本の民衆にたちむかうとき、強大な軍事力となる）だが、ここでもうひとつ忘れてならないのは、文化における力——つづめて言つて文化力だろう。早い話、ひとつの国の社会のなかで、頭がいい人はいい学校へ行き、出世をする。あるいは、中心部分の都市の文化が重視され、地方の文化はその真似をする。ことを世界大にひろげて言えば、ここ数百年世界を支配しつづけて来た西洋の文化は、まだいぜんとして世界の中心でありつづけている。これは全世界の誰もが洋服を着て西洋のファッションを追うということから、西洋起源の「先進国」の科学技術が「第三世界」を圧倒するという事実に至るこ
とだ。

政治力にしろ、経済、軍事、文化の諸力にしろ、力を持つ者は強者となり、それぞれの強者がたがいに競争し矛盾し排斥しあいながらも結局は大きくそれぞれに結びついて、力で下に立つ者をつくり出しながら階層を形成し、そのなかにそれぞれ自分の生きる「場」をつくる。これは、もちろん、力の大小に従ってそれぞれに自分の生きる「場」をかたちづくって階層をつくり出す、と逆に言ってもいいことだろう。

そして、階層は階層にふさわしい秩序や法律をつくり出すばかりではない。それにふさわしい認識から倫理、論理、あるいは感覚までも形成して、基底にもつとも力弱き人たちを置き、頂点に強者中の強者が突つ立つ階層のピラミッドをゆるぎのないものにする。貧乏人と金持とが、感覚の領域に至るまでちがいを持つというのはもうすでに多くの人が指摘して来たことだが、社会主義国の「ノーメンクラトゥーラ」と総称される特権階層の場合には、社会主義国での実際の体験から言って、私には「ノーメンクラトゥーラ」ならざるふつうの人間とのあいだのちがいの形成は、もう認識、倫理、論理の領域から感覚の領域にまで及んでいるように見える。ある社会主義国でのことだ、そこでの上下関係、差別におどろく私に「ノーメンクラトゥーラ」である私の話相手は、「この国はあなたの国とちがって社会主義国ですよ」と、私の無知をたしなめるように言った。

この世界で、私たちは階層のピラミッドのなかで生きている。好むと好まざるとにかかわらず、とここで言ってもよいだろう。いやおうなしにそこに生きる「場」を見つけて、自らがそうすることで階層を形成しながら、相応の安定を得るのだが、ピラミッドをきずき上げる力はさまざまに組み合わせあって、「場」に内在する問題の噴出を押しさえ込んでそこに安定をつくり出している。ここでもつと

もゆるぎのない「場」を持つのは、当然、ピラミッドの上層部に生きる人びとだろう。位置が下降するにつれて安定度は減り、最下部の人たちの「場」は、上層部の人たちの「場」が堅固なトリデとしてあるなら、外界の風が容赦なく吹き込むあばら家だが、ただ、それでも、そこでおとなしく分を心得て生きていれば生きて行けないこともない。南アフリカの黒人たちにとつても、ことはまさにそんなふうなものとしてある。

しかし、分相応に生きていてもはや生きて行けないというところまで事態は切迫する、ということがあるにちがいない。これは何も南アフリカの黒人たちの場合だけに限られた問題ではない。核戦争の危機を視界に入れるとき、これは人間すべてにとつて存在する問題だろう。

二番目に考えられるのは、その問題にも当然からむが、こうした奴隷のような生き方は何んとしてでもないやだ、おれは人間らしく生きたいのだと黒人たちが考え出す場合のことだ。これも黒人たちの場合だけのことではないにちがいない。核戦争の危機をまえにして、人びとが同じようなことを考え出したとしてもふしぎはない。黒人たちが「アパルトヘイト」の奴隷になっているのなら、今、全世界の人間は「核」の奴隷になっている。

そして、三番目にこういう事態もあるにちがいない。南アフリカで、白人が黒人の悲惨に我慢ならないものを感じて、助けの手をさし出す、あるいは、このピラミッドのありようはまちがっていると考え出して動き出すという事態だ。

三つの事態のいずれの場合でも、そこに人間の行為があつて、行為の力がピラミッドをかたちづくる力とあらがいがいながら問題を噴出させ、「場」を「現場」に変える。

つづきは製品版でお読みください。